

「南京研修参加報告書」

京都大学文学部 2 年 新村拓真

①留学前の自分の中国語の能力はとても頼りないもので、そのことは入国審査・ホテルのチェックイン・フロントに電話するときなど様々な時で実感した。授業が始まる前は、果たしてこの程度の中国語の能力でこの研修に参加してもよいのかと不安になるほどであった。しかし、実際に授業が始まり中国語にだいぶ慣れてくると、幾分かその不安は和らぎ、最終的には日常的によく使う中国語は大体聴いて理解できるようになり、また話せるようになった。また、最初のころは教師や現地のネイティブが話す中国語をいちいち頭の中で漢字に変換しなければ意味を理解することができなかったが、留学の終盤にもなると漢字に変換しなくとも音だけで意味を理解できるようになった。

②中国の文化は日本のものとはかなり違う。交通状況も違えば、街の景色や地下鉄の乗り方、商売のやり方も違う。この研修で私は初めて海外に来たのだが、日本の環境を当たり前に思ってしまうと、いつしかそれが世界のどこでもありうる普遍的な環境だと思ってしまう。初めての海外は、そうした「当たり前」を見直すきっかけとなった。

③本プログラムは、平日の午前又は午後50分の授業を4コマ受ける。授業は中国人の先生方が全て中国語で行う。初めは戸惑ったが、先生方は我々参加者の様子も見ながら、適切な話し方をしてくださった。また、金曜日の午後にはガイドさんが南京の観光地を案内してくれ、土曜日の午後には、南京大学の学生と共に自分たちの行きたい所へ行った。日曜日は何も予定がなかったので、私はホテルの部屋で体を休めていたが、同級生の中には自ら計画を立てて遠方の観光地に赴く者もいた。他にも中国文化の時間では、切り絵や伝統工芸を南京大学の学生と楽しんだ。現地の高校を訪問して自分の大学や日本のことを紹介する時間もあった。中国語の学習だけでなく様々な文化体験を楽しむことができた。

④私は2回生であり、研修から帰ってすぐに所属する専修を決めなければならなかった。私は研修に参加する前から東洋史学を専修しようと思っていた。南京には、総統府のように中国の歴史を感じさせるものが多い。それらを見物していく中で、どのような研究をこれから進めていくかの指針を立てることができた。研修に参加する前は、漠然と近代史をやろうと思っていたが、今回の研修を通して中華民国の成立に興味を感じることができた。このプログラムは、私に様々なものを与えてくれた非常に有意義なものであった。